

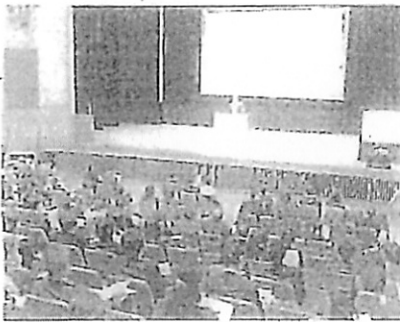
いわした・やすし 10歳で両目を失明した全盲記者。1986年、毎日新聞社入社。点字毎日編集部を経て、98年から人に優しい社会の仕組み「ユニバーサルデザイン」をテーマにネットコラムを配信。53歳。

年齢や性別、国籍や障害の有無にかかわらず旅を楽しめる「ユニバーサルツーリズム」への取り組みが注目される。2020年東京五輪・パラリンピックに訪れる外国人や障害者へのおもてなしをどれだけ充実させるかに関心が集まるが、4月から施行される国の障害者差別解消法も追い風になっている。

先月、横浜で開かれたJTB総研主催シンポジウムⅡ写真。移動やコミュニケーションなどにバリアーを抱える人も気軽に旅ができる支援技術や、宿泊施設に求められるサービスなどが紹介された。

冒頭、JTB総研社長の日比野健さんは「欧米に比べて日本はまだまたユニバーサルツーリズムへの意識が足りない」と指摘。ダイバーシティ(多様性)の必要性を訴えた。

移動式の手すりを設置するなど、ホテル内のバリアフリー化



## ユニバーサルツーリズム

を実践する富士レークホテル社長の井出泰清さんは、段差がなく車いすでも一人で利用できる大浴場、オストメイト(人工肛門用トイレ)、自動巻き取り式トイレ、トイレットペーパーなど、館内での工夫を紹介。視覚障害者には料理を出すときに言葉でメニューを説明するという。「採算見合いでノーと言わないサービスがモットー。普通の料理が食べられない人には刻み食やペー

スト食も用意する」と話した。福祉機器としての車いすの概念を超えた、健常者でも乗りたくなるような電動車いす「ウィル」を紹介した10年バンクパーラー・パラリンピック銀メダリストでNPO法人「DISHIPS32」代表上原大祐さん。「4輪駆動で雪道も砂利道もスイスイ。博物館のような人混みでも小回りが利き、旅の楽しみが広がる」とうれしそうに話した。

そのほか、一般のツアーとして、旅行中に透析患者が希望すれば現地で処置が受けられる海外ツアーや、車いすや足の弱い高齢者でも乗り降りしやすい低床構造のバスが乗り放題となるオアフ島ツアーなどが紹介された。

ところで、私は来サンディエゴで21〜26日(現地時間)に開かれる、第31回障害者とテクノロジーの国際会議「CSUN(シーサン)カンファレンス2016」に向けたJTBの企画ツアーに参加する。シーサンとは、主催するカリフォルニア州立大ノースリッジ校のこと。障害者のための最先端技術が発表されることから、コンピュータを扱う障害当事者はもちろん、研究者、企業の開発者が全世界から集まる展示会だ。帰国後に取材レポートをお届けする。